仏教——調和と平和を求めて（3）完

ヨハン・ガルトゥング

第五章　仏教と文化的適正さ

起源

本章の最初の課題は、方法論と認識論と宇宙論との関連を明らかにすることである。その際に、起源にさかのぼるという方策を用いることにする。この「起源」という言葉には二つの意味が込められている。まず、宗教は我々人間が世界を理解しようとする試みの「起源」（始まり）である。宗教は、明確で体系的な科学とよばれるものの時代が始まる前に、人々の心を形づくり、また人々の心によって形づくられた。「起源」の第二の意味は、世界の起源としての意味である。世界は一体どのようにして始まり、進化したのであろうかということである。宗教は果たして、その問いにどのように答えるべきなのか。

この点に関しては、キリスト教、ユダヤ教そしてイスラム教は、強固なまた極めて明確な見解を有している。旧約聖書の最初にある創世記の初めの四つの章は、西洋思想を理解しようとする人々にとっては金の鉱脈である。それは十分ではないにしても必要な源である。仏教の教説のような金の鉱脈は、二千五百年以上の歴史をもっている。それらは、一つの世代から次の世代へと伝えられ、膨大な議論と解釈と再解釈に付され、僧侶や聖職者やそして後には一般の人々によって、繰り返し読まれてきた。そして、長きにわたって、世界の作用に関する理解の源として最重要視されてきた。そこで述べられているすべては、単に道徳的観点からだけでなく、純粋に認識論的観点からも検討されてきた。世界についての我々の理解を形成するにあたっては、西や東へ向かう無数の支流に分かれながらも、最終的には大河となる前述のような知識の流れのほうが、いくつかの哲学や認識論の研究誌にみられる最新の流行やファッションよりも重要であることは間違いない。それらはせいぜい、そのような大河の波の上に浮かぶあわのようなものではないだろうか。

ここではキリスト教と仏教が何を述べているかという極めて単純で一般的なレベルを問題とするわけであるが、本章では、その宗教のメッセージの道徳的側面を除外して、認識論的観点から当該の宗教の基本的な世界理解に取り組むことにする。したがって、私の関心は、これら二つの宗教が何を正とし何を邪とするか、何を善とし悪とするかというよりも、それら宗教の主張の真偽にある。もちろん、それら宗教が暗黙の内にいだいているものが、その真偽に到達するための妥当な前提であるか否かということにも関心がある。世界的な二つの宗教からその道徳的メッセージを取り除いて、それら宗教の知識論、認識論に焦点をあてることなどはできないという主張もあるであろうが、私はそれに賛成できない。たとえ、ある種の理論的見地から、宗教の内での認識と道徳との分離は誤っているとされようとも、私は以下でそれが可能であることを実際に示したいと思う。言いかえれば、私は、二つの宗教の基本教義から、単純でありながら実り豊かで、大きな意味をもち、しかも認識可能なものを抽出する作業に取り組みたいと思う。

キリスト教

まず最初にキリスト教を検討してみたい。キリスト教の第一番目の最も基本的なメッセージ（創世記一・一）は、創造主と被創造物の分離である、と私は考える。

表Ⅰ：二つの世界，二つの世界を認識する二つの方法

	キリスト教 認識論的教義		仏教 認識論的教義
CA	創造主と被造物の分離 人間を超越する神 自然を超越する人間 自然を超越する神	BA	創造主と被造物の一致 人間の中の神 自然の中の人間 自然の中の神
CB	主体と客体の分離 永遠の独立した主体；霊魂 変化しない現実を観察し反省することができる意識	BB	主体と客体の一致 常住不変でも独立的でもない主体；無我 現実の中の意識；相互の因果関連で現実を動かし改善することができる
CC	純粋無垢な白紙状態の意識 研究による間接的知識で意識を満たす 基本規則：思考法…現実との完全な対応（十全） 無矛盾性，排中律 基本様式：演繹の樹	BC	「不純で」「騒がしい」意識：浄化すること 瞑想による直接的流れに意識を開く 基本規則：思考法…現実との完全な対応（十全） 矛盾，超越；苦を減じ楽を増大する 基本様式：縁起の輪
CD	現実は本来白紙状態 原子からなる自然 認識と情念からなる人間 個人からなる社会 国家からなる世界 原子論的現実；個別的な倫理	BD	現実は有機的，永遠的 人間の中の自然 社会の中の人間 世界の中の社会 全体論的現実；集合的な倫理，業
CE	創造によって固定された現実；存在 静的世界：アリストテレス的考え方，実体 動的世界：ガリレオ的考え方，関係 基本的に不変で無矛盾的な現実 通時的な方法；因果連関の樹 直線的な時間；有限性，閉鎖性 第一運動者	BE	常に創造される現実；生成 静的でなく，動的世界 不変ではなく超越的なダイナミズム 基本的に非永久的つまり無常で矛盾的な現実 共時的な過程，多角的な因果連関の網 循環的な時間；作用・反作用，無限性，開放性 第一運動者の不在
CF	理論を現実によって確証 経験主義，実証主義	DF	現実を価値によって確証 批判主義，構成主義

人間を超越する神が存在し、自然を超越する人間が存在する。そこには自然を超越する神の存在が想定されており、そのことは創世記の冒頭に明言されている。

このような単純な起源・前提からは、先に述べた起源の二つの意味に対応して、相互に関連する四つの帰結が導き出せる。なお、その内の二つは人間に、残りの二つは自然に関連するものである。表Ⅰはそれを示したものである。CA（Cはキリスト教を、Aは第一番目の意味である）が起源であり、そこから論理的に導きだされる帰結がCB、CC、CD、CEであり、前二者が人間に、後二者が自然に関連している。最後のCFは知識の妥当性に関連するものである。

CBから始めよう。自然を超越する人間という考え方からは、主体と客体の分離か少なくともそれに近い考え方が導き出される。しかし自然を超越する人間と主客の分離の間には若干の相違がある。つまり、主客の分離においては、人間の中の何かが人間のその他の部分から分離し、永遠の独立した主体すなわち霊魂となる。あるいはより非宗教的な用語を使えば、心となる。客体としての自然は、その重要性を失う。その自然と共に、客体的現実の一部である人間の身体も重要性を失い、心の一部としての意識に観察され反省されるものとなる。ここに医学の発生の根拠がある。しかし、心をさらに分割すると、客体としての心に対して主体である精神が考えられる。この精神とは心の中に生起するものを反省しうるものである。いいかえれば、これこそがあの有名な自意識であり、伝統的に多くの人々が、これをもって人類と動物の決定的な相違としてきたものである。こうした過程を経て、主客の分離のヒエラルヒーが確立され、それが現実の構成に反映され、CDとCEに発展していく。

CAという起源からの第二の派生的帰結はCCである。CCの出発は、意識を白紙状態にあるものとして概念化することである。私は、このことをキリスト教の教義の一部とすることに確信をもてない。しかし、神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべ

てのもの、地をはうすべてのものを支配させよう」（創世記一・二六、傍点筆者）と述べている。また創世記二・七には「神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた」とある。この二つの引用文が示すのは、人間が少くともいくらかは神に似た属性を備えた意識をもっていることである。しかしまた一方で、聖書には、善悪の知識の木のたとえ話がある（創世記二・九）。それが示すのは、少なくとも人間が堕落する以前に、その心は清らかで無垢であったということである。もしこれが人間の系統発生的発展だけでなく個体発生的発展のたとえ話でもあるならば、私はその述べるところを支持しよう。しかし、もしそうでないならば、このたとえ話が示すのは善悪の知識の木が人間に植えられたことだけであり、人は悪事を為すための口実を失なったということになる。

このことは深い意味をもつ。その意味するところは、どこか余所で用意された間接的知識で満たされることに意識は備えねばならぬということである。意識を満たすとは、あの有名なリンゴを食べることに似ている。それは、人間が思考することを学ばねばならぬことを意味してもいる。そして、現実を思考の内に反映するように、つまり現実に即して思考するためには、思考が現実と同じような構造をもたねばならない。もし現実が無矛盾であるならば、思考も無矛盾的でなければならない。このようにして、我々は西洋的思考の法則を手にすることになる。矛盾律、排中律、同一律がそれである。神の創造がそれ自体無矛盾的であるという前提の下に、この思考の法則によって、演繹的思考の基礎が築かれている。この演繹的思考を発展させると、少数の公理を頂点にして、そこからの論理的派生物である膨大な定理を底辺にする演繹の樹あるいはピラミッドになる。もし矛盾が許されるとすると、何かが推論によって得られることになる。そうなると、演繹的推論の中の論理性が消滅することになる。結局、神はこの世界を創造したのであって別の世界を創造したのではない。そして推論はただいくつかの（正しく定式化された）定理を真理とすることで、この世界を正確に反映するのである。つまりその推論は、考えうるすべての定理（あるいは世界）を真理とするものではないのである。

以上のことを前提に、現実の側を検討してみよう。その際に、再びCAに照らしてCDから始めよう。創世記によれば、現実は全く汚れない無垢の白紙状態であった。自然はあらゆる構成要素、究極的には原子からなるが、その内で最初に形成されたのは宇宙（光よ）であり、次に大気と水、そして地殻と生物であり、最後が人間であった。この順序は、まるで神がダーウィンの進化論に従ったようになっている。いやそうではなくて、ダーウィンが聖書に従ったというべきであろう。しかし、ダーウィンは、聖書の冒頭にある大ざっぱな記述のかわりにそのメカニズムを説明することで、わずかに創世記からずれていったのである。つまり彼は、宇宙とその創造に関するキリスト教の狭義に忠実であることで賞賛されるよりも、その矛盾に目を向けることを選んだというべきであろう。

しかし神は「土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹きこまれた」、今日の言葉で言えば、多分「人間に認識と情念を与えた」のである。それが暗に示しているのは、「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」（創世記二・一八）とあるように、神が社会を個々人で満たしたことである。そして神は女に次のように言っている。「あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる」（創世記三・一六）。つまり神はその発端から、社会に社会関係だけでなく家父長的関係をも与えることで、社会的領域に家父長的構造を持ち込んだのである。付言すれば、そこでは女性への罰（「みごもりの苦しみ」）と男性へのたくわえの罰「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない」（創世記三・一七）が述べられている。しかし、これ以上このことについて述べると、キリスト教の現実理解をこえて、キリスト教信仰の道徳的問題に踏み込むことになるので、この問題はこれで止めておきたい。

創世記では、かなり早い段階で、諸社会や国々からな

る世界が出現する。それは、創世記第十章（ノアの息子セム、ハム、ヤペテの子孫の歴史を述べたところ）の記述で、大洪水後の繁栄の頃である。しかし重要なのは、初めからこの世界が独立した国々からなっていたとされていることである。

聖書が現実を原子論的に捉えている（ほぼ同時期にギリシア人もこの原子論的思考を用いていた）と主張すること、そして、このことが、社会と世界のそれぞれの原子である個人主義とナショナリズムの両方に反映しており、その際に社会と世界においては、それぞれ個人的倫理の程度と国家的倫理の程度が問題とされると主張することは、不自然な印象を与えることはないであろう。今日の経済学が、まるで各々の国家が完全に独立しているかのように、国別の経済の規模から世界を把握しているところにも、原子論的世界観の影響がみられる。

しかし現実を創造主によって構成されたものとして捉えようとする際に、私が基本的に問題とするのは、次のような時間の順序である。最初に白紙状態に囲まれた第一運動者である神が存在し、次にその白紙状態が構成要素（原子、認識と情念、個人、国家）によって満たされ、その後で初めて構造が出現するということである。もちろん、自然は人間が誕生する以前に、人間は社会の以前に、国家は世界の以前に存在していた。つまり現実は新しい水準の組織が付け加わっていくことで構造化されるということになっている。今日でも、このような創造のイメージが多くの領域に影響を与えている。物理学における場と波についての原子論的で粒子論的思考の優勢、生物学におけるエラン＝ビタール（生命の飛躍）的考え方の劣勢、心理学や言語学においてゲシュタルトや構造的思考に対する行動主義の優勢、社会学や政治学において構造的パラダイムに対するアクター志向的パラダイムの優勢、国際関係において世界構造よりも国内システムから世界を見ようとする傾向が、それである。言うまでもないが、アカデミズムの枠をこえて世界中で問題になっているような今日的論争に私が言及した意図は、ここで問題にされているのは純粋に知的な立場をこえた事柄であること、そして新しい思考法の多くがキリスト教圏以外から出て来る傾向があることを示したかったからである。

CAからの第四の派生物、CEのテーマは、創造という行為ではなく創造の結果を重視することで得られる。現実は、おそらくは永遠に、あるいはそれが神の意に適う限りは、固定した不変のものとされる。そこには二つの基本的に異なった考え方がある。一つは運動も変化も存在しない静的世界であり、運動や変化は一時的か非現実的なものとされている（アリストテレスの個物、カッシーラの実体概念）。他方は、動的世界であり、運動や変化は神の創造の正当な一部として認められるが、それは固定した不変の法則に従う（ガリレオの力動学、カッシーラの関数概念）。現実は基本的には不変で、無矛盾的であるとされている。しかし、相互に矛盾のない不変なるものをあらわす法則は現実の奥にあり、それを発見するには不断の骨の折れる努力を必要とする。しかしながら、神が世界を創ったあり方、つまり真理はどこかにあるのであるから、真理の探究は、固定点への漸近線的収束のようなものとして理解される。このような比喩は天体の引力の係数、光の速度、熱の仕事当量、絶対零度などの宇宙の基本的パラメーターの測定にとっては的確なものである。

法則とは、様々に分岐している通時的で因果的な連鎖と基本的に考えられており、第一運動者である神というテーマは、第一原因や根本原因という形でくり返し問題にされる。典型的な因果的連鎖には、キリスト教的な時間の観念のように、始まりと終わりがある。それは西洋人の心を満足させるような何かに根ざしているのにちがいなく、現象が探究されると終わりとなる。したがって時間の有限性は因果連関にそって展開していく直線的時間の概念とともに導入され、後にある天体（より神に近い）の動きによって、等間隔に分断された（年、月、日、時等々）。

本質的に安定した（必ずしも静的でない）世界に関する知識が精力的に探究されてきたわけであるが、その内で最大の成果は、理論を現実によって確証するということである。理論命題と現実命題との対決、理論から抽出されるものと現実の内に観察されるものとの対決には、基

本的な非対称性がある。原理的には、現実は最終の審判者である。もし理論が現実を反映しなければ、理論は譲歩しなければならない。なぜか。本質的に現実は神が創ったものであり、理論は人間の手によるものだからである。もし理論を優先させようとすれば、それは人間が神の上に立つことになる。すなわち神への冒とくになる。私は、このことが西洋的認識論の基本原理である経験主義の源にあると思う。そこからは、実証主義にあと一歩である。私の理解によれば、実証主義とは、現実のあり方がそのまま将来のあり方でもあるという原理である。つまり経験を越えることが不可能なのである。今日において妥当な知識は、明日もまた、その次の日も妥当であるということになる。実証主義者こそは現代のキリスト教徒である。

仏教

次に仏教の検討にうつろう。我々はこれまでと異なった世界に踏み込むことになる。その世界を考察する方法が従来のものと異なるものであるのはいうまでもない。これまでと一貫しているのは、ある意味で意識はそれが関係する現実と同型でなければならぬという完全な対応（十全）の問題である。そして、キリスト教的認識論にとってと同様に、全体のシステムの中で同型であるためには、満たすべき多くの要請がある。

教義の上で、起源に遡ることはよい。しかし仏教教義の基本の一つは起源は存在しないということである。時間は無限であり、永遠から永遠へと動いていく。条件的因果連関の網には始まりも終りもない。無からは何物も生じないがゆえに、創世はなく、神が存在しないがゆえに創造主と被造物の区別もない。そのことは基本的前提としての創造主と被造物の一致の下では、創造が全く起こらないことを意味するわけではない。仏教徒は独立的で常住不変という意味での我の観念を拒否し、普遍的我の観念も拒否する。しかし仏教徒は、自己自身を過去、現在、未来にわたる他人と生命あるものにつながる過程と見なす考え方を拒否するわけではない。その高度にダイナミックな創造主と被造物の一致の観念は、キリスト教における神に近いものである。しかし、この神は人間の中にあり、人間は自然の中にある。そしてどちらか一

方が他方の上に立つことはない。従って、神も自然の中にあり、生命あるものは、人間と同じように、この劇的でダイナミックで持続的な創造に参加するのである。キリスト教の神は超越的であるのに対して、仏教では内在的である。

いいかえれば、我々が論じているのは全く異なった考え方である。一人の人間がその考え方のすべてを認識できるかどうかは、現在の課題ではない。ここで探究されるべきことは、前述したような基本的立場から導き出される論理的意味と呼ばれるものではない。基本的立場からの導出がすでに西洋的演繹法である。むしろ我々が探究すべきなのは、それとは異なった方法であり、しかも、その方法はキリスト教的認識論について先に述べられたことと比較可能な形で提出されねばならない。ここまで述べたことは表ⅠのBA（Bは仏教の意味）の内容であり、次に意識の側面に関するBBとBCを、さらに現実の側面に関するBDとBEについて述べたいと思う。しかし、このように意識と現実の両側面を別々に論じるのは、意識と現実の一致という基本原則に反することになるので、大きな困惑を覚えるが、論述上これは止むを得ない。そして最後に、知識の妥当性に関係するBFについて論じたいと思う。

BBにおける最初のポイントは主体と客体の一致である。しかしながら、この主体に関する仏教の特徴的で重要な前提は、常住不変で独立的な主体は存在しないということである。我は存在する。しかしこの我とは後に述べるような無常の法に従うものである。無常の法を人間に適用すると、それは無我の法になる。無我とは、「常住不変で独立的な我でない我」ともいうべきものである。おそらくそれが意味するのは、我が常住不変である限りは、独立的ではないということであろう。

これらすべては、現実の中の意識という基本的考え方と一致する。意識は相互的な因果連関というパターンで現実を動かして改善することができる。意識が現実に作用すると同時に、現実も意識に作用する。仏教徒にとって「私は通りを下る」という言い方は、通りにとっての完全な記述ではない。それは通りの上にいる私の行動を

記述したものにすぎない。その記述が不完全であるとすれば、それは「通りが私の上を昇っている」という言い方、あるいはそれに似た何かで、補足されねばならない。意識がある種の手掛かりによって、現実のより高度な像を求めて、現実を超越して、それら二つの相補的な像を同時に捉えようとする時、実際に起きていることが捉えられる。それはあたかも、コインの両側を同時に見ることでコインを理解しようとするようなものである。そのためには、コインにはもう一つの面があると知るだけでなく、過去の経験からそのことを述べ、その過去の経験から引き出された言明を確認するために、コインをいそいで裏返したり、鏡などを使うことになるであろう。

しかし、もし意識と意識の外にある現実の両方ともが常に変化し動いているとすると、果たして生起していることを把握するのは可能であろうか。その時に、世界の中にある種の固定した点が必要となるのではないだろうか。ここに、仏教的認識論の内で瞑想の果たす役割がある。現実に出会う準備とは、空の意識を間接的知識で満たすことではなく、「不純で」「騒々しい」意識を浄化することであり、意識や直接的知識の流れを受け入れられるように心を汚れのない状態にすることであり、おそらく現実を直接に意識に働きかけさせることである。

そこにも、思考を組織する方法が存在する。キリスト教と同様に、完全な対応を得るための条件がある。基本的条件は、ある種の超越性が得られるまでは、相互に矛盾する思考、少なくとも一見矛盾しているようなイメージを容認することである。その過程は、苦を減じ、楽を増大しようとする目的志向的なものである。言うまでもなく、このことは、八正道の一番目である正見（正しい理解）だけではなく、われわれを仏教的倫理に導く八正道のその他の七つによっても行われるのである。

そうすると次に、そのような理解はどのように組織だてられているかという疑問が起こる。ここに仏教的認識論の根本的様式である縁起の輪という考え方がある。この輪は、洞察や理解に上下をつけないという点で、西洋的思考の演繹の樹とは異なる。四諦や八正道は、公理の体系ではなく、一群の洞察、相互に関連しあう洞察とみなされるべきである。もし現実が調和を旨とするならば、

理解もそうあるべきであるし、公理の下に定理があるというように理解をヒエラルヒー的に組織化することは、その調和を破壊することになるであろう。

次にBDとBEの検討に移ろう。現実は有機的に関連しており、永遠に続く過程である。そこには、世界の中の社会、社会の中の人間、人間の中の自然がある。それらの間の境界線は判然としない、そのような境界線は思考の役には立つかもしれないが、現実を反映するものではない。現実は全体論的にのみ考えうるのである。従って、私は自分の行為に責任をもつが、同時にその責任を他者とも分けあう。私が善を行えば、その善は私の同胞にも行きわたる。なぜなら彼らは意識的にせよそうでないにせよ、私を助けたからである。また、私が悪を行えば、その悪は彼らにも及ぶ。なぜなら彼らは私を止めなかったからである。ここには世界のすべての構成要素を貫く業（カルマ）の考え方がある。それは、「お前がやったこと、言ったことは全部、遅かれ早かれ、お前に帰ってくるぞ」（ベルリンの壁の落書き）という言葉に代表されるような通時的で個人主義的な意味だけではなく、同時点で生あるものすべてを結びつけているという共時的で集合主義的意味をもっている。

このことは、仏教が自然、人間、社会、世界そしてそれらの関連のすべてを考える際に、より全体論的方法をとることを意味する。キリスト教的認識論の内に成長し、自然から世界にいたるすべてを認識する際に多かれ少なかれキリスト教的認識論の前提を受け入れている人々は、この全体論的洞察に至ることはできない。重要なのは、仏教的認識論ではそのような洞察は自然に身につくのに対して、キリスト教的認識論では、個人の心や集団の中に深く染み込んだ体質や考え方と戦うことで、また苦痛を伴うことで獲得されることである。

仏教にとって、現実はつねに創造され、生成するものである。世界は静的ではなく動的であり、そのダイナミズムは不変ではなく超越的である。現実は非永久的すなわち無常であるがゆえに、現象が我々に現前するあり方である法は非永久的なものである。法がそれに則って変化する法という意味での、法に関する法も非永久的であ

る。非永久的でないのは無常それ自体だけである。こうした矛盾の一つが、仏教徒による「人は矛盾と共に生きることができる」という考え方である。なぜそんなことが可能なのか、それは現実それ自体が矛盾であり、常に対立するものの闘争だからであり、矛盾をその内にいだけないような心が現実の中の意識（あるいは意識の中の現実）に参与することができるとすることは誤りだからである。意識の高い次元では、矛盾は消失する。しかし矛盾を消失するためには、我々は一度それを心の内に収め、悟りの素材として使用せねばならないのである。

それらの過程は共時的である。しかし、それはそれらの過程が時間の内に展開しないという意味ではなく、現実の内に同時に起こるという意味である。因果の連鎖あるいは因果の樹（キリスト教的認識論の特徴）では不十分である。その理由は、因果連関を否定するからではなく、因果関連の過程が直線的な時間の次元にそって組織されているからである。仏教の認識論には、原因と結果があるが、それらは常に相互的である。弁証法的思考と同じように、常に作用と反作用がある。「多角的な因果の網」という表現がある程度このことを説明するかもしれないが、より適切な表現があるであろう。比喩としては輪が適切である。

この観点は非常に重要で高度に実践的な帰結をもたらす。つまり、キリスト教的認識論と仏教的認識論からすると、人は変化する現実にどのように対応することになるのだろうか。キリスト教的認識論における起源を前提にすると、論理的手続きとしては、第一運動者にあたる何か、つまり過程の連鎖を動かし始めるレバーかボタンを探すことになる。これは、自由主義者が社会変動を経済成長から、そして経済成長を貯蓄や投資から、さらにそれらの先行条件から考慮する時に行っていることである。また、これはマルクス主義者が、第一運動者としての党のリーダーシップの下で、社会変動を革命から、革命を階級意識と動員から、またその先行条件から考慮する時に行っていることである。しかし仏教的アプローチは、同時に発生するいくつかの過程を求める。そして、それらの過程は、同時に、多くの角度から現実に働きかけるものである。一つの次元における偉大な進歩よりも、

十五の次元でのいくらかの進歩のほうが望ましい。それは偉大な進歩が悪いからではなく（西洋での偉大なる発見はもう一つの第一運動者を探究することになるだけである）、そのような方法では、始まりの一つの進歩さえも得られないからである（というのは、その他の十四の次元における無変化がその進歩を無効にしてしまうからである）。

それでは仏教徒は彼らの理解をどのように確証するのだろうか。確証の基本的形は、キリスト教的認識論のそれと必ずしも異なるものではない。他との比較による支持、反駁がそれである。しかし、その内容は異なる。西洋の宇宙論では、理論は現実によって確証される。そこには理論はそれに先んじてある現実と対応しなければ、変わらねばならないという前提がある。仏教の宇宙論では、現実は価値によって確証される。そこでの前提は、現実は価値と対応しなければ、変わらねばならないというものである。そしてその基本的価値はすでにあたえられている。苦を減じ、楽を増すというのがそれである。このような価値思考がすべての有情に適用され、それによって進歩の観念が世界に導入される。進歩が自動的に起きるという前提はそこにはない。すべて他のものと同様に、それは状況次第であり、集団のレベルだけではなく個人のレベルでもその評価は変化する。しかし仏陀から発する倫理の光は、意識とともにかなり混乱した現実、常に変化し常に経験を超越する現実の中で、手本として役立つ。キリスト教の認識論は経験主義と実証主義に表れているが、仏教の認識論は批判主義（そして四諦はその批判主義の表われである）と構成主義（そして八正道がその構成主義の表われである）に表われている。

キリスト教の樹と仏教の輪

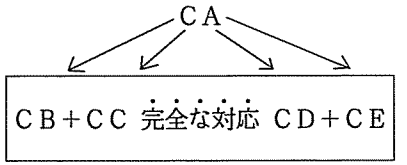
要するに、二つの異なった世界とその二つの世界を認識する二つの方法がある。我々は一方の思考法を用いて、他方の現実をとらえることができるであろうか。私は可能であると思う。しかし、その場合には、意識と現実との完全な対応という原則の下に認識論の内に作り上げられたものとは、別のものを発見することになるであろう。完全な対応を減じると、それ自体実り豊かな緊張あるいは矛盾さえもが発生するであろう。

ここで現在の課題に決着をつけたいと思う。

図Ⅰの上の図は、キリスト教的認識論であるキリスト教の樹を示したもので、これは次のような前提に基づいている。つまり意識と現実については、ある時点で、その妥当性が確証されねばならないこと、そしてそのことは意識と現実の完全な対応によって可能になるというものである。しかし、これらすべては、創造主と被造物の分離という頂点に位置する基本的前提から導き出されるものである。

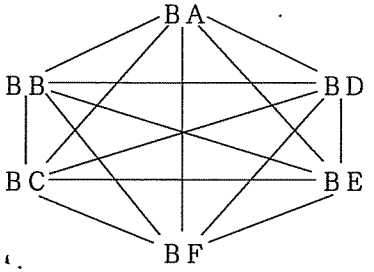
下の図は仏教的認識論である仏教の輪を示したもので、六つの洞察は相互連関という網の中で互いに結びついている。読者がそれら十五の関係のどれかを考察すれば、それらすべてがある種の一致、ある種の完全な対応を表現したものであることに気づくであろう。認識論の観点からみて、基本的に完全な対応は、BCとBEの関係の中にある。しかし、その輪を内容で満たすという別のテーマがある。それは、一方では非永久性に関する無常と無我の前提であり、他方では規制されうることと完成可能であることに関する苦と楽の前提である。これら

図Ⅰ：二つの異った世界を認識する二つの異なった方法を組織する二つの異った方法



CF

キリスト教の樹



仏教の輪

二つの前提は関連しあっている。非永久的でなければ完成可能であることはありえない。常住不変という前提は完成可能であるという前提と矛盾する。基本的な超越性という前提は必要ないのであろうか。

キリスト教的認識論はこのジレンマを、霊魂を超越可能とすることで解決したといわれている。そのためにキリスト教的認識論は、原罪という根本的な不変性を認め、イエス・キリストに仲介を頼み、神の恩寵を希望した。仏教の認識論ではジレンマは出じない。我々が非永久的なものであるがゆえに、超越は可能である。そしてこの超越とは、宗教の基本的課題である。さらにいえば超越するものとの一致が宗教の基本的課題である。超越するものとは、キリスト教世界では神であり、仏教の世界では涅槃である。宗教の見地からすれば、ここで認識論と呼ばれているものは、より深い宗教的帰結に到る構造を支える足場のようなものである。しかし、現在の我々の関心はこの足場である認識論そのものにあり、宗教的帰結については現在の関心ではない。

結論はこうである。仏教の認識論、広義の仏教文化の思想構造は、高いレベルの世界平和、社会開発、悟り、自然とのバランスをもたらすことのできる思想と言語と行為に、完全に対応するものである。

（ハワイ大学教授）

訳・山崎純一（やまざき じゅんいち・創価大学助教授）